

東日本大震災—その出来事と現在、祈りと支援への感謝

日本聖公会東北教区
主教 ヨハネ 加藤博道

大地震と巨大津波の発生とその被害

2011年3月11日（金）午後2時46分、日本周辺における観測史上最大で、1000年に一度とも言われるマグニチュード9.0の大地震が発生しました。建物の倒壊等地震も被害もありましたが、それ以上に続いて起こった巨大津波は最大の高さ40メートルにも及び、日本の東北地方を中心に、関東地方を含む太平洋側・沿岸部に約500キロにわたって壊滅的な被害をもたらしました。漁港や住宅、学校、高齢者施設、列車の線路等もすべて跡かたもないほどに押し流されました。場所によっては、建物の3階や屋上に避難しても津波に飲まれ、多くの方が犠牲となりました。同時に住宅のガスの引火による出火、石油コンビナートの火災等、火と水によって人々は恐怖の中に落とされ、そのまま一夜を過ごすこととなりました。

2014年1月時点での、死者・行方不明者は18,524人、現在でも仮設住宅等に住む避難者は28万人に達しています。また水道、電気、ガス等のライフラインも長く復旧しませんでした。

世界銀行の推計では、自然災害による経済損失額の大きさでは史上1位となっています。



東京電力福島第一原子力発電所の事故、爆発

続く恐怖は福島県の東京電力福島第一原子力発電所の事故、爆発によって起こりました。地震から約1時間後、津波に襲われた原子力発電所では全電源喪失により原子炉を冷却出来なくなり、メルトダウンが発生、水素爆発が起こって、重大な事故となりました。放射性物質の漏えいによる混乱と恐怖は今日に至るまで解決していません。そのため、周辺地域の住民は他の地域へ町ごと移動し避難生活をする等、帰宅困難の状態となり、さらに将来、自分の故郷に戻ることが極めて困難と思われる地域もあります。



被災地の人々は、生命を奪われ、愛する家族を失い、仕事も故郷も失い、さらに将来の回復の見通しは今なお、ほとんど見えてきていないという状況に置かれています。津波の犠牲者だけではなく、その後の避難生活の中で、孤独死する人、将来に希望を失い自死する人、また復興作業の重労働により過労死する人もあとを絶ちません。

東北教区について言えば、福島県新地の教会の地域が壊滅的被害を受け、磯山聖ヨハネ教会の信徒3名が亡くなりました。両親2人は行方不明でしたが3か月後にDNA鑑定で身元が判明、その娘である女性は、幼稚園で子どもたちを守り、助けながら、自分は寒い夜の中で体温を失い死んでいきました。

日本聖公会と東北教区は一

日本聖公会東北教区の主教座聖堂は太平洋岸に近い都市、仙台市にあります。わたし自身が、その主教座聖堂の中で大きな地震を経験しました。その日は帰宅し、電気もない真っ暗な中で家族と共に一夜を過ごしました。しかし実はその時起こっていた恐ろしい津波のことは、ほとんど知りませんでした。その時間に亡くなった信徒のことも、電気がこなくなり、テレビジョンもなく、新聞もなく、実は被災地の中にいても、何が起きているのか、ほとんど分からなかったのです。3日目の日曜日、教会に行くと、信徒たちが集まってきて、みんなお互いのことを心配していました。そこで初めて新聞を見、津波の被害の大きさも知ることになります。礼拝が信徒同士がお互いの無事を確かめあい、情報を共有する機会となったのです。



東北教区はただちに「対策本部」を立ち上げます。まずは信徒の安否を確認することから、それから心配な高齢者を中心に、若い信徒が水やわずかな食糧を届けに駆け回りました。しかし車のガソリンが手にはならず、道路の状態も劣悪で行動は大変制限されていました。

食糧も尽きかけた1週間後に、日本聖公会の総主事、宣教主事等が、遠回りをして東北にはいつてきました。東京と東北を結ぶ高速道路も寸断され、普通には走ることが出来なかったのです。それから日本聖公会の各教区から、支援の人々が駆け付けるようになってきました。

5月になって、この巨大な災害に日本聖公会が一体となって取り組むために、「いっしょに歩こう！プロジェクト」が結成されました。首座主教を代表とした、日本聖公会全11教区が一つになった取り組みで、これは日本聖公会の歴史の中でも初めてのことでした。

「いっしょに歩こう！」の名前は、「人を助ける」というよりも、「共に歩こう」、そして主キリストもわたしたちと共に歩いてくださっていることを信じて

歩もうという意味をもっていました。

そのスローガンは次のようにまとめられました。

1. わたしたちは、東日本大震災により困難を負って生きる人々に敬意を払っていっしょに歩きます。
2. わたしたちは、被災地の方々の生活と地域の再創造に向けていっしょに歩きます。
3. わたしたちは、主イエス・キリストが共に歩いてくださることに励まされていっしょに歩きます。

活動の主な内容は、被災地のはじめは避難所に、つぎには仮設住宅に住む人々への支援、とくに高齢者、障がいを持つ人たちの施設への支援、子どもたち、在日の外国人、とくに被災地に住む多くのフィリピン女性とその家族への支援等が中心となりました。日本の行政が十分に配慮していない人々に関わっていかうという意志を持っていました。

日本聖公会全体から多くの信徒のボランティアがこの活動に参加し、また約10名の専任のスタッフが仙台にオフィスをもって、活動の拠点となりました。

アングリカン・コミュニオンの祈りと支援への感謝

この間、アングリカン・コミュニオン全体から寄せられた大きな支援と祈りに心から感謝をいたします。多くの管区の大主教、首座主教、主教方をはじめ聖職・信徒の方々が被災地を訪問され、献金が寄せられました。

2013年10月には、ジャスティン・ウェルビー カンタベリー大主教も韓国における世界教会協議会(WCC)への途上、東京に立ち寄られ、福島県新地で犠牲となった3人の信徒の親族と面会して、その話を聞いてくださいました。



「いっしょに歩こう！プロジェクト」から第2段階へ

日本聖公会「原発と放射能に関する特別問題プロジェクト」の設置と
東北教区の歩み（「だいに・東北」の発足）

「いっしょに歩こう！プロジェクト」の働きは2011年5月から2013年5月まで2年間継続されました。そしてさらに新しい取り組みを行うために、第2段階へと進むことを決め、日本聖公会管区としては原発事故の問題に特化して取り組むこと、そして東北教区は地域に根ざしながら、東北教区の信徒の働きをエンカレッジして活動を続けていくために、「だいに・東北」という名称の活動を開始しました。これは東北地方の方言による聖書の言葉に関係しており、「互いに愛し合いなさい」という意味に理解しています。

「原発と放射能」の取り組みは、福島県郡山の郡山聖ペテロ聖パウロ教会を拠点に、長い避難生活の中で、将来の希望を持たない人々への配慮と支援活動を中心に、また放射能と原子力発電に対する問題意識を、世界に発信していこうとしています。

「だいに・東北」の働きは仙台の主教座聖堂を拠点としています。3名の信徒が亡くなった福島県新地にある「支援センター」の働きが継続し、地域の人々の拠り所となっています。また「いっしょに歩こう！プロジェクト」の働きの継続で、障がいを持つ人々の施設に協力し、また多くの方が、被災地を訪問し、祈ることができるようにプログラムを組んでいます。それは「祈り続けること」「忘れないこと」が何よりも大事と考えているからです。

「祈り続けること」「忘れないこと」

日本は世界の中でも経済的な大国といわれます。しかし今回の被災地となった東北地方は、日本の中でも貧しく、歴史的には周辺化され、疎外されてきた地方といえます。大震災の前から、高齢化と過疎化、貧困、若者の仕事がなく、将来への希望が持てない、そういう状況は深刻化していました。

日本聖公会東北教区について言えば、その範囲、広さはイングランドの約半分の広さがあります。そこに24の教会と、17の幼稚園・保育園の施設があり、働く聖公会の教役者は、主教を含めてわずか10名、それに数名の退職した聖職が手伝っています。キリスト教の宣教・伝道が困難な日本社会にあっても、とくに厳しい状況にある教区と思います。しかし、大震災においては、内外の多くの教会、人々に助けられ、歩んできました。

同時に、わたしたちは、世界の各地にある自然災害、戦争や紛争、その中で犠牲となり、極めて困難な状況にある人々が本当に多いことを、覚え続けたい

と思います。

東日本大震災と日本聖公会が、英国教会をはじめ、アングリカン・コミュニケーション全体から覚えられ、祈りと献金が捧げられてきたことに感謝し、深刻な状況がまだ続く中で、わたしたちは主と共に、困難な人々と共に歩む教会でありたいと願っています。これからもお祈りくださいますようお願いいたします。

キリストの名によって。

以 上。

東日本大震災を覚えて

この祈りと嘆願は、東日本大震災発生3周年にあたり、2014年3月9日の主日礼拝、3月11日の記念礼拝、祈り等において、およびその後も用いられることを意図して作成されたものです。

慈しみ深い神、慰めの主よ、（——年を経た）東日本大震災を覚えて祈ります。どうか、被災地にある人、避難生活を強いられている人、特に日本社会の中で生きることの困難に苦しむ人、将来の希望を見い出せない人（ことに——）を支えてください。

また原子力発電所事故により、失われた自然と人々の生活を覚えます。故郷を離れて生活する人、危険な作業に従事する人とその家族をお守りください。そして政治と社会に責任を持つ人々に正しい道を歩ませてください。

わたしたちもまた、これらの苦難をつねに覚えることができますように。日本聖公会「いっしょに歩こう・パートⅡ」の働きを強めてください。そしてわたしたちも思いと力を合わせて、共に歩み続けることができるように導いてください。

いのちの源である主よ、東日本大震災のすべての犠牲者、そして世界各地の災害と争いの中で生命を失った人々を、あなたのみ腕の中に抱き、永遠の安らぎを与えてくださいますように。

主イエス・キリストのみ名によってお願いいたします。アーメン

(2014年2月 日本聖公会主教会)

*祈りの冒頭の（——年を経た）は、2014年3月には「3年の時を経た」あるいは「3周年を迎えた」等と言い替えることができる。